

## 7.5 学位論文要旨 (別紙様式博5)

### 学位論文要旨

学位授与申請者

氏名 羽原 康成

題目：環境配慮的な社会を目指す活動による意識と行動の変化に関する研究

-木を使ったものづくり活動が建築・住居系学生と、活動地域の住民に与える影響-

本研究の目的は、建築教育と環境教育を包含する「木のものづくり活動 (WCA)」が参加者に与える影響 (2 章) と、参加者の活動に対する意識の特性 (3 章) や、その教育活動を受け入れる活動地域の住民意識の実態 (4 章) を、統計学的分析と長期に及ぶ参与観察を合わせて考察し、木の構築等を作る人間と、活動を受け入れる地域や、制作物を使用する人間の意識と行動の変化について明らかにすることである。そこで、WCA 参加者に対してアンケート調査及び参与観察を行い、分析した。これにより、WCA の参加者と活動地域の住民との交流は、参加者が人や地域のために行うデザインを学ぶ機会となり、活動地域の住民に環境保全意識を普及させる可能性を示した。そして、総合的な建築教育を目指した WCA が、環境配慮的な生活の実現に貢献する人材を育成する可能性を示した。以下に本論文の概要を章ごとに示す。

#### 第1章 序論

本章では、木のものづくりを通じた教育活動に関する社会的背景と、中山間地域の社会活動の変遷などを述べ、人間の生活に対する自然環境の役割や、環境配慮的なボランティア活動や教育活動に関する既往研究をレビューし、本研究の位置づけと目的を整理した。

#### 第2章 大学生による木のものづくり活動参加者の意識

本章では、京都府南丹市美山町大野区での WCA の参加経験が、地域の貢献や環境保全に関わる意識と行動に及ぼす影響を明らかにするため、アンケート調査及び長期に渡る参与観察を行った。WCA 参加者を対象としたアンケート調査結果を、相関分析と Mann-Whitney U test により分析し、参与観察と合わせて考察した。これにより以下の知見を得た。①回答者の 90%以上が WCA に参加して良かったと回答しており、満足感が高かった。②参加者は、地域住民と交流して、人や地域に貢献したいという思いが高まった。また、参加者にとって、大野区の自然や景観に触れる事や、地域住民との交流は、魅力的な経験であった事が明らかとなった。③参加者は、WCA によって地域や森林保全への貢献意識を高めると共に、環境に配慮したものづくりやデザインによって地球環境保全に貢献する意識を高めていた。④WCA によって人や地域に貢献したいという意識が高まった参加者は、貢献の頻度を高めたいという思いから活動を継続する意識を高めていた。また、設計やプレゼンテーションの技術を、活動を通じて高めようとする参加者も継続意識を高めていた。他方、WCA の満足感が高くても、次年度以降も活動を継続しようとする

## 7.5 学位論文要旨 (別紙様式博5)

る意識は必ずしも高まるとは限らない。その理由として、WCA の参加が、設計や制作、友人とのつながりが目的であった場合、その目的を達成した事で満足感を得て、活動を継続する理由を失い、継続する意識が低下したと考えられた。⑤持続可能なサークル運営に対する参加者の意識は、あまり高くない。⑥美山木匠塾参加者の意識の特徴は、「木のものづくり」と「地域住民とのふれあい」の満足感の高さであった。

### 第3章 木のものづくり活動による学生意識の個人差

本章では、木のものづくりに関する現地調査、企画、設計、制作、発表、社会貢献的な運用による建築教育や環境教育の活動が、参加者に与えた影響の個人差に着目した。WCA の教育効果は参加者によって異なる。個人差の特徴を明らかにする事で、個人の特性に配慮した教育的手法により参加者への教育効果が高まる事が期待される。

主に得られた知見を以下に示す。①WCA から得た効果の設問について主成分分析を行い、「地域貢献意識」と「森林保全意識」、「木のものづくり」の3主成分が抽出された。更に、クラスター分析から参加者を『地域貢献群』と『デザイン群』、『中庸群』、『環境保全群』の4群に類型化した。②『地域貢献群』は、様々な実体験をポジティブな姿勢で受け止め、地域への貢献や、環境に配慮する意識を高めていた。③『デザイン群』は、「ホームステイ」などの地域交流を、制作のための調査として客観的に捉える傾向がみられた。④『中庸群』は、控えめで偏りのない姿勢の参加者が多いと考えられたが、活動の実践による実体験から教訓を得て、生かそうとする意欲がみられた。⑤『環境保全群』は、WCA の取り組み以上の森林保全や林業に関わるプログラムを求めていると考えられた。

### 第4章 大学生の木のものづくり活動の活動地域の住民の意識と行動

本章では、WCA の参加者にとってクライアントとなる活動地域の住民の意識に着目した。WCA が限界集落である活動地域の住民の意識に与えた影響を明らかにするために、アンケート調査と長期に渡る参与観察を行った。アンケート調査結果を、相関分析と Mann-Whitney U test により分析し、参与観察と合わせて、WCA の持続可能性と、地域住民との関り方について考察した。主に得られた知見を以下に示す。①大学生が、大野区での活動や、地域住民と交流する機会を増やす事は、地域住民の WCA に対する満足感を高めると考えられた。②地域住民は参加者からのヒアリングによって、居住地に関心を高めていた。地域住民が居住地に関心を高める事は、地域おこしや地域の持続可能性を考える上でも重要と考えられた。③地域おこしに関心の高い地域住民は、大学生との更なる交流に関心を持っていると考えられた。これは、大学生と地域住民が交流を深める事で、地域住民の地域おこしへの関心が高まる事を期待しているためと考えられた。

### 第5章 総合考察

本研究では、参加者は WCA によって、地域や地球環境保全に貢献する意識を高め、地域おこ

## 7.5 学位論文要旨（別紙様式博5）

しに貢献した事を実感する事で、教育効果が高まる可能性を示した。また、限界集落での WCA は、地域が持続してこそ活動が持続できるため、活動成果での地域への貢献も重要である。しかし、参加者は自立的に運営して持続させる意識が弱く、これを改善する事が今後の課題である。一方で、一部の地域住民は、WCA によって住民が地域おこしに関心を高める事を期待している。また、活動の認知度の高まりと親密な交流によって、参加者に要望を伝える住民が増加し、活動への期待や要望が多様化している事が明らかとなった。

WCA に対する参加者の満足度は高い。その理由は、参加目的であった友人の獲得や能力の向上等が達成された事の他にも、参加目的ではなかった活動地域の自然環境に触れる事と、地域住民との交流や、環境保全についての学びによって満足感を高めていたからである。また、活動によって地域に貢献しているという意識が、活動の継続や、地域に貢献したいという思いを高めていた。

本研究では、WCA での参加者と活動地域の住民との交流は、参加者が人や地域のために行うデザインを学ぶ機会となり、活動地域の住民に環境保全意識を普及させる可能性を示した。そして、総合的な建築教育を目指した WCA が、環境配慮的な生活の実現に貢献する人材を育成する可能性を示した。

以上の結論を踏まえて今後の研究の課題と将来の展望を示した。

以上